



## 容疑者だけが「異常」なのか

北川 亮 (報道部)

「本当に不幸なのか、読んでもらえれば分かると思います」。先日、知的障害者や家族でつくる全国手をつなぐ育成会連合会の久保厚子会長にそう言われ、連合会の機関誌(9月号)を取り寄せて読んでみた。表紙から裏表紙まで、障害者たちの写真で埋め尽くされていた。

家族と頬を寄せ合いはにかむ人、仲間たちと肩を組みVサインをつくる人、卒業式で緊張と晴れやかさが入り交じった表情を浮かべる人……。どれも普通のスナップ写真。でも、そこに彼らが日常を生活している命のきらめきがあるから、見ていると胸に温かいものが染みてくる。

相模原市の施設で19人の重度障害者が殺害された事件。容疑者の元職員は「障害者には生きる価値がない」「不幸だ」と供述したという。偏見と差別に満ちた言動。だが、機関誌は容疑者への反論だけが目的で作られたわけではない。巻頭の記事はこう憂いている。「残念ながら、障害のある人を一括りにして『不幸だ』と決めつける認識は社会の中に根強く存在します」

容疑者だけが「異常」なのか。健全者と障害者を隔てているものは何なのか。事件がえぐり出し、突き付けたものを深く考えねばならない。